

## 平成 23 年度研究功労賞推薦書

受賞対象者 黒川 徹 先生

黒川 徹先生は 1960 年に九州大学医学部を卒業され、東京警察病院での 1 年間の実地修練の後九州大学大学院医学研究科博士課程小児科学（永山徳郎教授）を専攻されました。1970 年に新生児けいれんの臨床的脳波学的研究で医学博士を取得されました。先生は 1970 年 6 月から 1972 年 6 月までの 2 年間、米国ハーバード大学医学部神経科フェローとして留学され、C.T.Lombroso のもとで新生児脳波、脳超音波 B スキャンの研究をされ、またボストン小児病院でてんかん外来の患者さんの診療にも従事されております。

帰国後、九州大学医学部小児科学教室の助手、講師、助教授としててんかん患者さんをはじめ多くの小児神経疾患の患者さんの診療と小児神経科医の育成に力をそそいでこられました。

1987 年 7 月、障害児教育講座の教授として上越教育大学に赴任され、大学院生の研究の指導にあたられました。1990 年 1 月、国立精神・神経センター武蔵病院に赴任。第 2 病棟部長として多くの難治性の小児神経患者さんの診療に従事され、ここでも多くの小児神経科医を育成されました。

1992 年 4 月国立療養所西別府病院院長に任命され、病院経営に力をそそがれると同時にてんかん患者さん、その他小児神経患者さんの診療を通じて大分地区のてんかん診療の大きな精神的支柱になりました。2001 年 3 月、西別府病院の名誉院長に任命された後も医療法人社団三光会誠愛リハビリテーション病院の院長としててんかん患者さんや障害を持った子どもたちの診療に熱心に取り組んでおられます。

先生は日本小児神経学会の運営委員、理事を長年務められ、また日本てんかん学会の理事として学会の運営に長年貢献してこられました。また 1995 年には第 29 回日本てんかん学会学術集会の会長を務められました。

先生のてんかん研究の中心は臨床てんかん学であるということが出来ます。先生の臨床てんかん学の研究はハーバード大学への留学のきっかけになった「新生児の臨床的、脳波学的研究」に始まっています。Lombroso 教授のもとで研究、経験されたてんかん学を帰国後小児てんかん全般にわたって発展されていきました。

そのいくつかを紹介いたします。中心・中側頭部に発作波を有する良性小児てんかん（ローランドてんかん）を日本で初めて報告（*Acta Paediatrica Japonica* 1975;17:30-36）され、わが国の良性部分てんかんのさきがけとなりました。また全般発作の一次性、二次性の鑑別がジアゼパム静脈注射による脳波の変化から判断出来ることを実証されました（*Folia Psychiatrica Neurologica Japonica* 1979;33:15-20）。さらに West 症候群と Lennox 症候群の治療と予後（*Pediatrics* 1980;65:81-88）、小児てんかんの自然歴

(1979;11:84-90)、小児てんかんの死亡率、死因( Brain Dev 1982;4:321-325)、寛解率( Advances in Epileptology, Raven Press, New York, 1982,pp121-123)など多くの臨床的研究の成果を報告され、わが国の小児てんかん診療の進歩に貢献されました。

先生は国立精神神経センター・武蔵病院第 2 病棟部長、国立療養所西別府病院院長時代にも若い小児神経科医たちをよく指導され、多くの臨床研究の成果を発表され、また学会や研究会あるいはてんかん協会の研修会などにおいててんかんの臨床、研究の進歩について多くの講演をされてきました。

先生は日本てんかん学会はもちろん九州地区のリーダーとしててんかん患者さんの診療と福利に大きな貢献をされました。てんかん治療研究財団の研究功労賞の受賞に値するものと考え、ご推薦申し上げます。

国際医療福祉大学副学長  
福岡大学名誉教授  
満留 昭久